

第二次長沙作戦(二)

明第九〇二九部隊

陰山の假繙帯所

衛生 衛上 岡山 光夫

闇夜敵弾下の患者收容

車中 陸上 中島 登

縁下の力持

担ニ 少尉 郡司 博人

梨梨市を離脱して

担ニ 陸兵 足田 政光

輜重隊より有難う

担ニ 少尉 本田 善三郎

弾薬を擔いで

担ニ 少尉 本田 善三郎

弾雨下の戦友收容

衛生 衛軍 大迫 道夫

竹槍を造り覚悟する

担ニ 少尉 本田 善三郎

多数の患者を擁して

車中 陸兵 水町 晃透

梅敷橋の苦闘

255

2154

陰山の假繙帶所

衛生班

衛生上等兵

岡山 光夫

昭和十七年一月三日 長沙縣陰山附近の

部落に差掛つたのは既に夕刻でありました

何時も元氣な戦友達も連日連夜の行軍で

皆涙も切つて居ります

オイ 今夜は宿営らしいぞ

と誰かが自信ありげに嬉しそうに叫びました

た 部隊の先頭が左右に分れて部落に入つて行く。重い足も軽くなり何か口笛でも吹きたい気持ちになりました。命令受領者も帰つて宿営も確實になりました。

其の晩は陣地構築の急を要する情報が入りました。衛生隊も同じ宿舎の大隊八小隊李(四五ノ第一大隊)と共に、敵襲に際しては宿舎の警戒に任せよと命令がありました。私共衛生隊は車輛中隊の分隊以下十二名から編成された三担架、保衛隊八名の二担架、衛生兵の私と野田一、警兵の三名、合計二十三名が一大隊配属として分進して居ました。

其の夜は一時間交代で裏の山に分哨勤務に付きまじながら、遠くに銃声を聞くのみで、部隊との交戦はなく無事に朝を迎へる事が出来ました。

夜が明けて銃声が段々近づいて来るとは

午前十時頃 陰山東北第一ニ高地を警備
する第四中隊分哨の機関銃が突然猛烈に火
を吹き出しました。續いて一三五高地一ニ
五高地から一斉に砲出し 銃砲声は忽ち
して今まで静かだった山野を震撼せしめま
した。

午後には乃つて衰へるところが益々激しく
なり敵聲は指舎の上壁にブス／＼突刺りま
す。熾烈を極める敵弾をくゞつて傳令が飛
込んで來ました。

大隊本部の軍医殿から患者が多く出るう
しいから急造担架を十担架用意せよと言つ
て來ました。

裏の竹山に登ると流弾がビュ／＼飛んで
來ます。竹を切る者 諸材料を集める者
紐立てる者 人員は少いが全員協力してや
つたので短時間で立派なのが出來上りまし
た。

夜に入つても相衰はず戦いは激烈でありま
す。火線が交錯して物凄の程です。時々友
軍の突進の喊声か聞えて來ます。

午後九時頃衛生隊は大隊本部指舎に於て
患者を收容せよとの命令がありました。愈
愈私達の戦いが始まるのです。戦傷患者発
生を予期して充分用意しておいたので慌てま
せんでした。

外は眞暗です。敵の崩壊した狭い道路を
一歩々々用心して大隊本部に到着しました。
川島軍医殿と上野軍医殿が患者を治療準備
をして居られました。報告すると喜ばれて
待つて居たと申されました。私達も早速軍
医殿の指示を受け繃帯所用設備準備にかかり
ました。

約一時間して担架兵が担送五名を運んで
來ました。つゞいて本科兵が急造担架で隊
付衛生兵と共に二名運んで來ました。

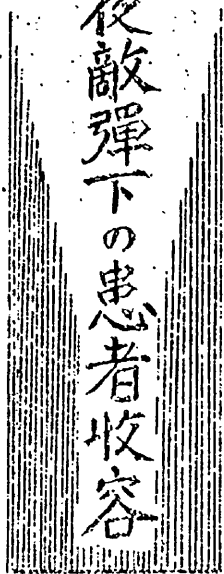
軍医殿と共に治療を始めました。骨折患
者も居ます。机の引出しの縁を取外し前膊
骨折の急造副木を造り、又大腿部骨折には
坂壁を外し綿布圍を引裂いて容易に出来ま
した。

零時頃陰山より二料ある郎兵衛中隊に第一
回の患者を後送しました。

銃砲声は絶間なくして居ます。患者は續
續と運ばれて来ます。或患者は圧迫止血帯
をそつと除れば、動脈を損傷しておるらし
く、ピクツ、ピクツと小さい動脈管から鮮
紅色の血液が噴出します。これは煮沸滅菌
したペアン鉗子で直に結紮されました。然
しまだ小さい血管があるらしく拭いても拭
いても血が滲み出る。軍医殿が一ツ／＼
叮嚀に探つて結紮される。苦痛を訴へる患
者の呻声が悲痛です。一時も早く治療を要
する重傷患者ばかりです。軍医殿二名と衛

生兵二名で一先懸命やりました。
五日の正午頃までには完全に手當して第
二回の後送が出来ました。

闇夜敵弾下の患者者收容



車輛中隊

陸軍上等兵 中島 登

陰山に宿営した時であります。周囲は間
断なく銃砲声が響いて居りました。
私達は歩四五第一大隊に配属されて大隊

長第三次衛 (二) 又

本部より約五百米西側に宿舎をとつてゐました。何時患者收容を命ぜられしかわからぬので、種々準備して少し体を休めやうとしてゐる時

「衛生隊は三担架を以て第三中隊の患者收容に任ずべし」

と大隊本部より命令が来りました。さあ愈々自分達の働く時が来たぞと本部に廻り、本部の軍曹殿の指揮で、十五六名(歩兵三四名)は夜間標識を頼りに四中隊に向かいました。誰一人話す者もなく、大隊砲の宿舎の前まで来た時軍曹殿が

「誰か」

と誰何されて、ついで

「手榴弾を取れ」

と言はれるので、何だらうと思つて傍に行つて見ると、敵の負傷兵が迷ひ込んで来て居るのでした

その中口兵は大隊砲の宿舎にあづけてやつと四中隊に到着患者收容を終りました

翌日大隊本部より衛生隊は大小行李と共に大隊本部の宿舎に引揚げよとの命を受け直に本部に引揚げ、大隊砲機関銃の患者收容を命ぜられ、半分は大隊砲半分は機関銃と患者收容することに決まりました

愈々出発です。準備を終り宿舎前に集合してゐると、大隊砲の將校の方が来られて「御苦労だが頼む、途中敵が居るから注意して行け」

と言はれました。大隊砲の分隊長の指揮する兵三名警士十名の掩護で出発しました。山を越へ、田を走り、小川を涉つて一軒ばかり前進した時、不意に敵の急射を受け、凹地に飛込んで伏せました。敵のケエツコ弾が私達の頭上を掠め前後左右に落下する。私は沸くと滑く敵心に勇氣をかり立てら

水て 敵彈の间断を利用して真先に飛出し
ました 三回走つては伏せ 五回走つては
伏せして やつとの事を一軒の民家に辿り
つぎました

掩護の兵は山の麓に取りついて今の中だ
と叫んで居ます 幸松林があるのでその中
に走り込み 急いで患者を收容して引返さ
うとすると 又しても敵の猛射を受け 田
の土手に遮蔽して间断を利用して 水田の
中 小川の中を通つてやつと患者を本部に
擔ぎ込み任務を果すことが出来ました

衛生班

山田衛生班長

△ 散りゆきし友の墓標に手向くべき花一
つなし木枯の吹く

縁の下の力持

担架第二中隊

陸軍少尉

郡司 博人

今時作戦に於て特に深く印象づけられた
のは俗に言ふ「縁の下の力持」と言ふ言葉
であります

「縁の下の力持」確に味ふべき言葉であり
ます

担架を持つて患者を前後送する気持と

長第ニ次衛

銃をもつて敵陣地に突入する氣持は何処に
差異がありません

一月四日正午頃

長沙市街に於ける敵我

の銃砲声は物凄く 死地に追いつめられ

敵のも切きは其の極に達して居りました

前後未の猛攻撃に患者收容を命ぜられた衛

生隊は 中隊長殿の率ひられる一ヶ小隊を

十三聯隊に 私の指揮する二ヶ小隊を二十

三聯隊本部に 大く患者收容に向ひました

途中無事負傷者もなく七名の患者を收容

し 午後三時野戦病院閉鎖の報を受け、息

つく間もなく再び野戦病院に向つて出發し

やうとした時 當時二十三聯隊配属の中山

小隊の知念上等兵が衛生兵の手當を受けて

ゐるのが目につきました

「おい知念どうした
ハイ負傷しました」

よく見ると左大腿部の普通銃創です 開け

は知念上等兵も第一番目の患者を後送 病
院に申送つて再び部隊を追及中負傷したの
です

「痛むか」

「はい、え」

「もう担架もないのが歩けるか」

「ハイ歩けます」

斯うして知念上等兵は私達と一緒に野戦病

院に向つたのであります 残念なり到着

した時は三時から二時間も過ぎました

おたのです その頃は恰度反転作戦が開始

されて 馱馬部隊徒歩部隊と次々に反転を

始めたのであります 中隊長殿の率ひら

れる一ヶ小隊は患者が多いためでありませ

う何時までも帰つて来ません 衛生隊の行

軍序列が来ても帰つて来さうにありません

止むなく准尉以下数名の指揮班を残して
行軍序列に入りました

我反転作戦を見抜いたか 敵の攻撃物凍
く 銃砲弾は頻りに附近に落下炸裂します
が 幸ひまをを負傷者が出ませぬ

午後六時頃になると日は西に沈み あら
りけ次第に夕闇に包まれて 遂に眞暗な夜
に成りました 一間もはなれぬらもう前
者の姿は全然わかりません それに増し
い程まで振切り水は道路は二三日前よりの
雨で一人でもへ真直に歩けない様に泥濘化
して居ります 相當早い行軍であります
さうすれば危い こつちだ
と誘導してある間に前の担架とは相當はな
れる おまけに人員不足のため晝間かり集
めた土民を使用して居ます 前よりの遺傳
に依れば斜を前方に敵が廻つてゐる 成程
時々発砲する度に火が見えます
あなたが上る度に患者が痛がりますしやべ
るなと言つても你的奴よくしゃべる 你在

叱咤しつつ、後選をつゞける担架兵の苦勞は
並大底のものではありません

二時間歩いたでせうか前方より敵が多
くて抜けられないと遺傳が来ました 各分
隊馬部隊が糞を食つたのでせう

此処で約五分間担架を卸して休憩をする
ことが出来ました

歩兵部隊の敵排裏に依り前進を始めた時
には 土民は或は逃げ 或は使用不能にな
り 一ヶ分隊五名の小銃手に二名に減り

他は担架を擔ふ始末であります 小銃手は
各銃を二挺或は三挺持つて行軍して居ま
す 然しまた担架は七担共無事に續行して
居ます

やつと安心したものの、気がついて見ると
と独歩患者の知念上等兵の姿が見えませぬ
もしや落伍したんぢやないかと又心配にな
つて来ました

長第ニ改衛(四)

附近の担架兵に聞いても「今しか見た」と言ふ者はかりで誰一人知つてゐる者はありません。一番最後尾の担架かう一人、担架兵の顔色のぞき込みました。居るうにありません。三番目の担架兵のぞいた瞬間、安心すると共にグワとこみ上げ、来る熱いものを感じ暫くは口が利きませんでした。やつと
 知念すまんは、誰かと交代せよと言つてあたりを見廻しました。銃を二挺持った小銃手より他に人員が余つてゐる筈がありません。
 小隊長殿よくあります。大丈夫であります。
 としきりに言ふ知念上等兵の言葉に思はず顔をやめて泣いてしまひました。
 我々は確に縁の下の力持ちです。此れ位の熱と力があれば大丈夫なとつくづく感じ

ました

郎梨市を離脱して

担架第二中隊

陸軍兵長 疋田 政光

一月四日師團は反転作戦を開始し、二二
 一〇郎梨市に到着私達の中隊は輜重隊に
 配属を命ぜられました。
 私は命令受領者中沢伍長殿の傳令として
 輜重隊に行きました。一月六日早朝工兵隊
 に依つて架設された橋梁は同隊の手で依つ

て爆破されましたが、ものその時は敵は対岸に火器を以て盛んに命令受領者者の連絡路を射撃しておました

輜重隊より出発に関する命令があまりましたので

「今は弾丸が来るから馬は危険だ、俺は中隊に命令を渡してすぐ帰るから暫く此処に待つて居てくれ」

と中隊長殿は馬を残して中隊に帰りおました、敵は兵力を増加したうしく盛んに射撃をつづけておます、一時間も経つたかまだ中隊長殿は帰りおしません

輜重隊の中隊長殿が私のすぐ近くに来て眼鏡で敵陣地を見て居られたが、橋の処にエツコが居ると言はれますので、私も眼鏡を借りて見ると、爆破された橋の際にエツコが猛烈な火を吐いて居ます、言ひしれぬ憤りを感じて

「あれを撃つてよくありますか」と中隊長殿に聞くと

「中隊長殿は連絡して見よ」と言はれたので、私が連絡に行くと「よし、エツコが見える方へ射撃してもよい」

と言はれたので喜んで飛んで帰り、夢中になつて射撃しました

ふと後を見ると輜重隊の乗馬が居ません、私の馬が一頭残つておる切りです、驚いて家の後に出ると見ると輜重隊の馬は五六百前方を前進しておます

慌て、馬を牽いて後を追ひました、敵隊が激しく飛来するので、馬がやられはせめか、心配で何回も後を振り向きました、漸く部隊に追ひつき、即ち市を離脱して約四料の地兵に着営しました、中隊の位置がわからぬので、あちこち尋ね廻り、やつと中

長第員 衛(三) 5

隊は前方三料の部隊に宿營してゐることか
わかりました

二〇〇〇頃 輜重隊から命令がありましたので 命令を持って外に出ましたか 雨は降つてゐるし あたりは眞暗で道は判りません 附近の兵隊に聞きますと すぐ前方の高地には敵が澤山居るから行かれなと言ふ それに命令は急を要するのでありませんから又命令受領者者の所に帰りました

然しまた一日中隊長殿や程尉殿に顔を見せておないので どちらに心配して居られるだらうと考へて 其の夜はよくお世話させていただきます

翌日〇八〇〇頃出発 私は輜重隊の尖兵の所まで馬を飛ばして五百程前方に担架を持つた部隊を見つけた時嬉しくたまりました

斯うして中隊に追及すると 中隊長殿准尉殿を始め戦友達が非常に喜んでくれています

輜重隊よ有難う

担架第三中隊

陸軍少尉 本田善三郎

作戦行動中數十名の患者を担架で前送すると言ふ事は 時に今次第二次長沙作戦の

反駁作戦に於ける如きは並大抵のことでは
ありません

道路は悪し 連日敵弾はひつきりなして
来る 一線部隊から来てゐる補助担架兵は
慣れないうものだから 百米二百米と間を切
る 特に夜間に於ては一軒甚だしいのにお
ると二軒も間を切つて道に迷つて居るとい
ふ有様でした

彼等も苦しいでせうが こちらも誠に大
変です 工兵や山砲の兵はよくやつてくれ
ました

こんな時 弾薬糧秣の輸送を終へた輜重
が患者を馬に積んでくれた時のありがたさ
嬉しさは とても言ひ表すことは出来
ません 涙の出る程有難かつたのでありま
す

長沙に於て然り 鄭梨市 青山市 馬家坂
に於て然りであります

服部部隊長殿 野田少佐殿 各中隊長殿 各
を親切にして下さりました 感謝致します
往きは弾薬糧秣を運び 帰りには多数の
患者を運び 戦斗もやり 實際御苦労様で
す

患者を積むとすれば藁から集め 食等の
世話から大小便の世話まで涙の出る程です
六師團の輜重隊は非常に患者に親切です
他師團のそれと比べて雲泥の差があります
ほんとは輜重隊よありがとう

木村衛生兵長

△ 傷つける馬の傍去りがてに兵隊を切
りつゝ泣けり

長第2次衛 (二) 6

弾薬を擔いで



担架第三中隊

陸軍少尉

本田 善三郎

どの附近だったか地名を忘れてしまひました
が、反転作戦に移つてから二三日後の
事があります。

部隊はどん／＼前進中のところへ、然も
最後尾の附近に飛行機から益人に彈薬を投
下します。

反軍は彈丸に飢えておます。一発たりと

敵の頭です。然し私達には意者を持つてお
るし、自隊のも他隊のも馬は一杯で投下彈
薬を運ばません。かと言つて捨てる所はわ
けには参りません。

どうしたらよいだろうかと思つてゐると
兵器勤務隊の隊長岩下中尉殿が重機の彈を
十連近く擔がれました。私も負けずは居ら
れません。

直に部下の小銃兵と保安隊の中小隊長
傳令等と呼戻して、小銃彈重機彈手榴彈
大隊砲彈を持つてだけ持ちました。

部下の一人、力持の藤本重夫上等兵はわ
ざ／＼天幕を出して、一杯飲んで擔いで行
きました。私も手榴彈八発と重機彈六連を
擔いでアゴを出しかけて前進しました。

赤兵部隊に遭ふまで二日間連日、歩兵第
二十三師隊の九中隊と、第二機関銃に彈を
渡しました。歩兵の曹長は彈丸はわらんか

と言ふと「ほんとはですか」と言ふ様な顔を
してゐる 数は少なかつたが大変喜ばれま
した

我々は患者を運ぶ どの代りこの弾で一
人でも多く敵を撃つてもらひたい 手榴弾
一発でも重く感ずる強行軍に 整理して置
んだあの弾が少しでも役に立つたでせうか
少しでも役に立つたら私共の苦勞は報い
られぬのです

実際あんな時には飯より弾であります
弾の無い日よりなさは一入です

衛生班

川口曹長

△ 焼芋を頬張る古兵まだ若し

△ 尻さひつて笑ふ者なし強行軍

弾雨下の戦友收容



衛生班

衛生軍曹

大迫 道夫

私は衛生部の一員であります 松尋の部
隊の任務は一般衛生検閲中でも 特異な業
務をなすのでして 作戦時傷者の無い場合
には最前線部隊に追隨して前進するのであ
ります 一度負傷者發生の報告を第一線
より受取るや 其の負傷者の数に應じ直ち

長 第三隊衛生班 (1) 7

に所要の人員を編成 一又是れすの一本道を前進してある各部隊の列を潜りつゝ追抜き 又悪路をも忘れて路なき路を突破し 目的の火線に突入 種々の危険を冒して負傷者を捜索收容するのであります

そして沈着迅速に傷者を收容して速に所定の假纏帯所に後送り来り 完全なる初療をなす極園であります

故に一般に想像されて居ます衛生兵の膽力や気力では却て任務を遂行することの出来ない場合が多いのであります

これは 一月九日長沙縣早公堤東北方約百米の山中で私達が経験した出来事でありま

此の四五日食ふや食はず 其の上ろくに寝て居る時でありましたが 私達はまだまだ元氣一杯でありました

此処三日程敵の大軍は我を包圍した様だ

能くか 四方より空を飛ぶ銃弾をひびきりながらに注いで居ります

聞けば私等の部隊は相衰えず最前線に在つて此の頑敵を蹴ちうして後方部隊の通過を容易ならしむる任務を持つてゐるとのことでした

今日も同じく午前中の目的は予想以上の成績を以て終了し 次に約五百米東方知名高地の堅陣に據つて反撃を繰返す大部隊の敵を突破すべく 部隊は約二百米側方高地に陣地移動を開始しました

今迄の処はなかなか心細い感じのする位置でありました 地上約三十米位の瘦松の生へた丘陵で 背面には八字型に列んだクリークがある処でした

而し戦戦命令を聞き殊更に私達の心は躍動しました 今度は一寸面白い戦争が出来ると思つたからうでもあり 又移動するに此

の危険地域を突破しなげればならぬ勇猛
が滲いたからでもあります

此の危険地域とは八身型に列んだクリー
クを通過する間は良いのですが、一度クリ
ークを出れば三十米後の丘陵があるのみで
東西両高地から見通し出来るばかりか、以
前より狙撃して居る弾道下であつたからで
す

先頭部隊は既に此処を各々躍進して居ま
した。私達は後等を凝視し、心の中では無
事に通過してくれろと祈りをつづけて居ま
した

愈々私達の通過の時が来ました。何時も
聞き馴れた長殿の前進命令も、此時はか
りは腹底深く沁込る採れ気がしました。午
前中の激戦で護国の鬼と名つた戦友、担架
一つニツ三ツ……

担架兵達は必要以上の物品は全部捨て

身軽に身を固め、細心の注意を拂ひしつか
と担架を覆りつゝ、躍進の歩を踏み出しました

私は後尾を見るため二三の下士官と共に
後尾につきまじりました

取兵等は銃声に狂奔する悪馬をしつかと
誘導しつゝ、弾雨を潜つて前進する。担架

も無事通過。私達の部隊も既に通過を終ら
んとして、ホッとは安堵せんとした時でした

一弾は一人の戦友に命中したらしくバツ
タリ倒れました。彼はナニクツと叫び、

「私達……」と泣きながら、
「私達……」と泣きながら、

と言ふと共に、前方に向ひ
後尾が引受けを早く前進せよ

と叫ぶ。その戦友の傍に駆けつけました。光
頭曹長、宮原伍長、松下上等兵と共に無言

の中にしつかと抱き上げ、前にも増した銃

長
第
三
次
衛
二
一
八

砲弾の中を前進しよした

此の時途傍に依り部下の自傷を知られ
隊長殿 隊長殿の指揮する担架が迎へに未
した 早速其の場で担架は組まらぬ担送
しました

初めて自傷ヶ所はと見ると頭部一面鮮血
にまみれてゐます 此れでは早く治療しな
ければ大変です 何処か安全な処はないか
と見廻し三十米前方に一家屋を見 期せ
ずして此処に搬入しました

早速隊長殿の命に依り頭頸部貫通銃創
の治療を始めました 實に一瞬の出来事で
只々夢の様でした

外ではもう後方部隊も危険地帯を通過し
だらりしく敵弾も稍々鎮つて居ます

然るに突然盲毒の迫撃砲弾が私達の頭上
の屋根で炸裂しました 林達は炸裂音と感
じた大でしたが 隣の部屋では瓦や煉瓦が

蹴蹴して居りました 遂に危険を悟り又部
隊退及せました

道々生命に異状なき様祈りつゞけました
が 遂にその甲斐なく十時十五分 一同に
みとらぬ乍ら萬が一と存へつゝ又女の住む
故國の靖國の御社に帰つて行きました
冥福を祈る一同の目にはきりりと涙滴が
浮んでおました

竹槍を造り覚悟する

担架第二中隊

陸軍少尉

本田 善三郎

反転作戦を開始した師團は執拗に食ひ下

つて来る周囲の敵を撃破して、一月九日
青山市を出発前進しました

朝霧の中を前後左右に気を配り下り前進
し、馬家塚の部落に近づいた途端、右側の
霧の中からパン／＼と敵の銃声が聞
かれました。注意はしな
がらぬもの、不意だったので其の場に伏せて
様子を見ると盛んに子エツコの火が見ま
す。余り弾着がよいので頭も上げられま
す。

敵が寄り出してから大部分の者は家中
に入ってしまったのであります。私もやつと部下
の居る所に行きました。此の時の子エツコ
が合図の様にと水から煙は、よくまあ敵は
沢山弾を持って居るものだなあ」と思ふ位
やかましい程響き出しました。

一寸顔を出すと狙撃します。迫撃砲弾が
屋根に落ちてびつくりさせる。第一線は少

い弾を節約し下り適確な銃火を浴せて居り
ます。

ボツ／＼患者が出始めました。私共は上
民がクリ／＼に投込んでおる枝切れを拾ひ
上げて来て天井を走り、先づ患者を移し
自分達の部屋も迫撃砲が来ては大丈夫の様
に天井板を破つて設備し、患者の収容治療
に任じました。

戦斗は益々激しくなるばかりです。空か
らは飛行機がよく協力してくれま
す。時々輸送機が弾薬を投下してくれま
す。

お、弾が来た。ド／＼と早く早く中
兵をやつ／＼けてくれ

と一人でかんでおると、司令部に行つてお
る命令受領者の中沢任長が来て

「区署部隊も全員戦斗準備をやれ
と命令を傳達しました

「どうも今夜あたりやつて来さうな

長第百衛の

と先刻から考へて居りましたので、銃を持つておいた兵全員(瀾生兵も)に竹槍を造らせました。そして銃を持つてゐる者と竹槍組を入れ混せて中隊で〇ヶ分隊を編成して時の至るのを待ちました。

第一線から司令部へ三名の兵が夜間標示をやつてゐます。それを盛んに敵が襲うます。見て居てハラ／＼します。

準備が出来ると落着きました。とう／＼愛刀が没立つ時が来た。何時でも来いと勇み立ちました。

保安隊は竹槍の突物を見せ造る様になりましたが。

保安隊は突物はしないと言つてとう／＼造りませんでした。そんな事より彼等は食はんがための物糞りに懸命でした。これを見ていさゝか淋しい氣持になりました。

私は當時手帳に

「全員竹槍を造り最後の覚悟を決む。書類の整理も終る。」

と書いて居りますが、遂に最後の覚悟にならなくてすみしました。突のところが中隊長代理だった私は、あの時ある程度の覚悟をなさざるを得ませんでした。

明ければ十日、もう月がすぐ出るか一寸位出て居るかと言ふ頃十三聯隊が氣持のよい喊声をあげて突撃をやり出しました。そして前進路を開き、夜明け出発の予定が延び／＼になり、夜が明けから患者を收容しつつ、前進しました。

第二小隊の故宮本菊男隊長がやられたこと、朝の患者收容中のことでした。

梅敷橋方面
馬家坂

多敷の患者を擁して

梅敷橋の苦闘

車輛中隊

陸軍佐長 水町 晃透

一月廿日夕刻より馬家坂附近に於て開始せられた戦斗は、深夜に至るも益々激しくなるのみで、彼我の銃砲声は山野にこだまし、又流星の如く交叉する淺光彈、そして時々ま記る突撃の喊声は深夜に一層の凄惨の氣をそゝります

恰度十日の午前一時頃、聯隊より命令が来て、聯隊は強行突破し梅敷橋方面に向ひ前進する

進することとなり

私達衛生隊も聯隊命令に基き、前日より收容中の患者を前送しつゝ、梅敷橋方面に向ひ前進しましたが、漆の如き暗夜に加へ道路は悪く、ともすれば連絡を切りさうになる。私は各担架を駈け廻り、連絡を切るな歩度を伸せ、前の担架にくつゝ、いつ行けと激勸し乍ら馬家坂附近に逢出しました

然し戦ひは益々激烈を極め、第一大隊前面の戦斗は特に激しく、砲彈の炸裂する光曳光する銃彈、飛来する銃彈は頭上に足下に盛んに喰ります

前進は非常に困難となつて参りましたが、患者を護送する私達は自分の事など考へて居りません。一時も早くこの危険界を脱し、患者の安全を期せねばならぬと、各兵叱咤激励し、或は伏し或は屈し、前進をつづけること約七百米、後二百米余で安全地帯

長第百九篇 (三) 10

に到着するといふ寸前 患者駄送に任じて
ゐた坂下一等兵は右下脚を貫通され「やら
れな」と言つて前のめりに倒れましたが
再びがバと起ち 手綱をしっかりと握り馬の
鬣威に纏り片脚で前進して行く 私坂下
一等兵の責任観念の旺盛さと 心魂を傾注
して一切の手段をつくし己の任務に邁進す
る状を見 偉大なる版の精神力に只驚嘆す
るのみでした

漸くにして安全地帯に到着した衛生隊は
直ちに担架を一夕所に集結し坂下一等兵を
收容 人員失呼をなし 奥家坂に於て待機
してゐると 第二大隊の患者五名が到着直
に收容しましたが 患者はこれらも重傷それ
によほど空腹と見えて

衛生兵殿 飯を持ってゐられたら少し下
さい
といふ 無理もない青山市より此処まで十

三騎隊は激戦につぐ激戦です どうして飲
を炊く暇がありません 私に食ひかけの飯
を持つて居つたのでやると

あゝうまい
と 傷の痛さも忘れて食ふ其の姿を見れば時
ぐつとこみ上げて来るものを感ぜ思はず敵
陣を脱み「ウームンヤンコロム」と叫びまし
た 出来るなりは敵陣に突入して思ふ存分
暴れてやりたい気持をどうすることも出来
ませんでした

午前五時二十分頃より戦も大分緩慢に
なり 部隊前進に伴ひ私達も前進を始め
奥家坂を去る北方一軒附近に友軍を馬十数
頭が枕を並べて戦死しておました 私達は
この忠馬に無限の感謝と祈りを捧げつ、同
地を通過 前進を續ける中夜明けとなり担
架の前進も漸く容易になり やれくと思
小利那 梅森橋南方高地を占領してゐる敵

が猛烈な集中火を浴せて来ました。距離約三百とつさに私達は右側を流れてゐる小流に飛び込みました。そして猶前進を續行した。山頂よりの射撃は益々猛烈で前途愈々困難となりどうする事も出来な。敵は我部隊に蹴りかきものともみてもつた。攻撃前進の氣勢を見せませす。

早く此処を突破しなけれはと敵射撃の中断を利用し約三百米前進しました。この小流に一曲部があつて此処は敵眼に暴露し猛烈なエッコの集中射です。解除小行李の駈馬がやられました。敵は二百五十米に近接してゐます。前進は非常に困難になりました。敵彈足下は落下し土を跳ね上げ水柱を上げます。もう身動きも出来ません。

此の時後方にあつた二大隊の一角中隊が前進し攻撃を開始しました。私のすぐ前に二大隊長小隊中佐殿が居り水で降りそぐ。

銃聲の真只中に立ち

早くあの高地を奪取せよと居

ると此の部隊は全滅する

と叱咤激励される。その言葉の終らぬ中に

中隊は攻撃を敢行しました。早く行けと

言はれる。大隊長殿の声に前進を始めました。

依然集中火を浴せてゐる屈曲部を五六担架

無事通過したが。前の解隊小行李が敵が

すぐ前に居るといふ。こう前進しない

よ。い俺が行つて見て来る。分隊長も前進

は現在地に暫く待つ

と言つて米反小隊長殿はジャブ川

中を駆け前へ出て行かれました。米兵の

擲弾筒が轟然と敵陣に炸裂します。敵の

抵抗は依然頑強です。

暫くして前の駈馬部隊が前進を始めまし

た。前の敵は逃げのがなあと思ひなう担架

を前進せしめました。激しい敵陣に水中に

長官東二次衛

(111)

伏せ或は屈す 全員濡鼠で寒氣肌を刺し皆
 ぶさ／＼震へてゐます 小隊長殿が走つて
 降り止ました 前方はどうですかとせくと
 もう大丈夫か すぐ百七八十米先に敵が
 五六名居たが 俺が今切つて来た
 と事も存分に言はれる 軍刀を見るに切先
 が刃こぼれし血糊がペツトリとついてゐま
 す 四名を斬り手エツコ一を鹵獲して居ら
 ぬ 白兵を突へて激傷を以して居られませ
 人 伏せては起すの前進に担架を滞らすま
 りと懸命です 此より原曲部通過中下圍一等
 兵は頭部を貫通され 鮮血は顔をつたひま
 した 私達は「下圍につかりせよ」と
 激励しましたら 彼は苦しむ呼吸の下から
 「担架は早く かしんネー(残念)」と一言
 を残して此世を脱死を遂げました
 私達は悲憤の涙をこぼり下圍に等兵の屍
 を收容して前進すること三百 支那兵の屍

四が擧つてゐます 小隊長殿がやられぬの
 はこれだといふと 神田上等兵だつたと思
 ひます 擔いでゐる下圍一等兵の英霊に
 「下圍お前の仇は小隊長殿が討つて下さつ
 らせ」と涙声で言つておました 涙もな
 くなつた私は泣けて／＼ 仕方ありません
 でした

漸く私達は午前十一時頃全患者を一軒家
 に收容して治療に任じて居りました 時河副
 分隊長が来て村上と福岡がやられぬ上村も
 やられぬと言ふ 鬼角小隊長殿に報告しや
 うと小隊長殿の前に行きました 情況は我
 りに不利 傷者は續出す一方 小隊の收容
 力は一杯です 私達は小隊長殿の心中を察
 して暗然たるものがありました
 三名を收容して治療を始めましたら 皆
 却りの重傷です
 此の時猛烈なるチエツコ隊が私達の居る

一軒家に集中 危いと叫んだ瞬間 患者
 治療中の福永衛生軍曹は腹部に直管銃剣を
 受けて倒れた 皆思はず駆け寄り
 班長殿大丈夫ですか と言ふと
 汗は平気な 横腹を少しやわらわら」と言
 つて平気で患者の治療をしてゐる 私はず
 に福永軍曹の豪膽さに驚かされた
 敵は却々退かぬ 依然一軒家東南方四百
 の高地より激しい射撃をしております 友軍
 日隊は一ヶ中隊 それも今迄の戦いで約一
 ヶ小隊の兵力しかありません 戦いは益々
 困難になる一方 私達衛生隊よりも部隊の
 安全を期すため 小銃若干と鹵獲せる予
 エツコとを合せ戦斗すると共に 残余は急造
 担架の調製に任じて居りました
 その時敵は再び一軒家に対して攻撃して
 来ましたが 敵陣は屋根瓦を蹴飛ばす 壁を
 貫く 突に危険極まりない有様です

あつ馬がやられた
 と誰かが叫ぶ 騎隊大行李の馬です 此の
 時子エツコを以て應戦中の山口一算兵又牧
 一算兵は敵弾のため受傷しましたが 遂に
 これを制圧しました

午前十一時頃より敵は遂次退却し解隊主
 カとの連絡も取れ 第三大隊第九中隊より
 担架兵二十五名の援助を受け 四十数名の
 患者を前送しつつ、行軍序列に入り孫家橋へ
 と前進を開始しました
 在支三千余 幾多の戦斗に参加致しまし
 たが 私達衛生隊がかかる戦斗をしたこと
 は初めてでありました

担架第二中隊

陸軍上等兵 桑江 良永

△ 彈幕を叩いて駆け出す雪野原

長沙第二次(12)